

▼老君垂迹淡 (●○○●●●) 刊本

岩波古典文学大系本の底本である尊経閣本では、「話」となっているが、他の写本および刊本では、「淡」と記されている。そこで「淡」について考察する。

「話」と「淡」を考えるとときに、九十七句目と九十八句目を対比させて考えることが重要だと思う。

97 ▼老君垂迹話 (老君迹を垂る物語) (尊経閣本)

97 ▼老君垂迹淡 (老君迹を垂ること淡なり) (刊本)



98 ▼莊叟處身偏 (莊叟身を處すること偏なり)

「話」と「淡」では、九十七句目の「垂迹」の解釈が異なる。

まず「話」の意で解釈をすると、「仏陀の生まれ変わりだと伝えられる老子の物語」のように仏教的な内容を含む一文となる。

一方、「淡」の意で解釈をすると、「(無為自然)の生き方を説いた老子は淡々と生きた」のように老子の生き方(無為自然の教え)を後世の人々に伝えた意になるように思われる。ここでは、道真が老子の無欲で淡々とした生き方や、莊子の偏屈ではあるが心のままに生きた生き方に共感を覚え、心を慰められていると思われる。その「老子」と「莊子」の生き方を「淡」と「偏」として対比させていると思われる箇所なので、ここは、「淡」の語を採った。